日本児童文学の父

小川未明（おがわみめい）（1882-1961）

高田に生まれる

1882 年（明治 15）4 月 7 日小川未明（本名健作）は、高城村大字五分一（現・上越市幸町）に父澄晴、母チヨの長男として生まれました。待望の子供であった未明は、「捨て子は育つ」という当時の慣習により、3 歳になる頃まで隣家に預けられました。岡島小学校（現・大手町小学校）を経て高田中学校（現・高田高等学校）に学び、1901 年（明治 34）、東京専門学校（現・早稲田大学）文科に入学します。未明は、少年時代を過ごした上越の自然と思い出を多くの作品に投影させています。

文学の道へ

1902 年（明治 35）、早稲田大学と改称後、未明は英文科に転科し、生涯の師坪内逍遙（つぼうちしょうよう）と出会います。未明は、逍遙指導のもと、小説の創作に没頭し、1904 年（明治 37）には、文壇への処女作「漂浪児」を発表します。この時、逍遙が贈った筆名が「未明（びめい）」でした。1907 年（明治 40）には、第一短篇集『愁人』を刊行し、その後は、時に幻想性を帯びつつも、社会主義的ヒューマニズムに裏打ちされた作品を次々と生み出していきます。

童話作家として

1906 年（明治 39）未明は島村抱月の勧めにより「少年文庫」（早稲田文学社）の編集に携わります。これを契機に童話創作にも力を注ぎ、1910 年（明治 43）には童話集『赤い船』（京文堂）を出版、大正期に入ると「赤い蝋燭と人魚」、「月夜と眼鏡」など現在も読み継がれる傑作の数々を生み出しました。1926 年（大正 15）、未明は「今後を童話作家に」（「東京日日新聞」）を発表、小説の筆を断ち、童話一本で活動していく決意を示しました。

芸術院賞を受賞

戦後は、児童文学の発展に力を注いだ長年の功績が認められ、1951 年（昭和 26）芸術院賞を受賞、1953 年（昭和 28）には文化功労者に選ばれました。故郷の春日山神社には、1956 年（昭和 31）、「雲の如く」の詩碑が建てられ、除幕式には未明本人も出席しました。その五年後、1961 年（昭和 36）5 月 11 日、東京高円寺の自宅で 79 歳の生涯を閉じました。